



Title	「紙衣」イメージの変遷について：日本と中国の比較研究を中心に
Author(s)	張, 冉
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100489">https://doi.org/10.18910/100489</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「紙衣」イメージの変遷について —日本と中国の比較研究を中心に—

張冉（日本学・D1）

## 1. はじめに

本研究の目的は、日本与中国における紙衣の歴史的変遷を比較することによって、日本の紙衣に対する社会的及び文化的な考え方の特徴を明らかにすることである。

PAPER の語源とされるパピルスはBC3000年頃古代エジプトで発明されたとあるが、日本における紙の歴史を振りかえってみると、その概念は「纖維を絡ませたもの」というパピルスと異なる古代中国発端の製法である。

『後漢書』（5世紀）によれば、105年に蔡倫が紙の漉き立てを行い始めたという。それは具体的にいうと、纖維をバラバラにほぐした後、絡ませて漉きあげるという製法である。それ以降、朝鮮半島を経由して、『日本書紀』610年に高麗僧によって紙及びその製法が日本まで伝えられたとある。そして、中国において紙と同じように植物性の纖維を利用する産物としての織物がある。寿岳文章氏によると、紙と織とは漢民族によって植物性纖維の双生児となったと指摘した。生産性低下などの時代背景のなかで、原料及び製法上における一致する部分を考慮しながら紙と織の機能を併せて、紙衣が生まれた。紙衣は「紙子」とも記されるが、紙で作った衣服を指す。日本の場合、多数は上質の厚く漉いた和紙に渋柿を塗り、夜露にさらして揉み和らげ、衣服に仕上げたものである。

## 2. 紙衣の変遷

### 2.1 日本における紙衣イメージの変遷

日本で紙を衣服の形に構成して着用するようになったのは、平安時代の『白虎隨筆』に「紙子の先律僧より始まる」という記述があるように僧侶から始まったものとされる。『朝野群載』巻二の「性空上人傳」にも性空上人が播磨の書写山の草庵で紙の衣を着用したと記されている。紙衣が僧侶から始まる原因について、まずは古来より紙が仏教と最も密接な関係があるとされ、当時紙を最も身近に利用できたのが仏僧であるという点が考えられる。さらに、紙衣は絹布などのように蚕を殺して製造するものではなく、また、女人の手を煩わさずに自ら作ることができ、仏教の戒律に適合するからであるとされている。

鎌倉時代に入ると、『源平盛衰記』には尼が法衣の下に紙衣を着ている描写があり、一遍上人が諸国を遍歴した際、その所持品である「十二道具」の一つとして紙衣を携行していた記録も残されている。また、『枕草子』や『源氏物語』などの貴族文学において紙衣について言及していない点から、この時期紙衣を着用したのが主として僧侶や尼僧などの仏教関係者であったことが推測される。つまり、平安時代から鎌倉時代にかけて清潔かつ神聖なイメージをもつ紙衣は僧侶から反古紙を自身の手で綴り合わせ、衣料として利用している。

室町時代の末になると、風を通さずに夜間の寒さが防げる特性から、武将が戦時の陣羽織や胴着として着用するものとなってきた。現存する紙衣のうち最も古い例として、米沢の上杉神社に所蔵されている上杉謙信の紙衣胴服が挙げられる。『名将言行録』（1869）に、豊臣秀吉自身が白紙衣の羽織を着用したり、部下に紙衣を奨励として与えたりすると記される。それ以外には、前田利家は領内に贅沢を戒める令を出し、家臣たちが正月の拝謁に際して紙衣を着用するように指示していたなどの例が挙げられる。要するに、戦国時代において、紙衣は単なる防寒具にとどまらず、武士が戦場で着用する実用的な装備であると同時に、紙衣を着ることが名誉の象徴かつ出世のシンボルともなったと考えられる。

さらに江戸時代中期以降、徳川家康が天下を統一し、戦乱が一旦収まり、領内の殖産興業政策の推進に伴い物資流通が活性化し、紙の生産量が市民の需要に応じられるほど増加してきた。誰でも安価に入手できるようになった紙衣は軽くて、かさ張らず、暖かいという利点に加えて、麻などの粗い纖維で作られる着物を着ていた時代に、安価な紙衣は庶民に欠かせない防寒着まで発展した。江戸の庶民文学としての俳句、川柳、淨瑠璃や歌舞伎の世界において、紙衣姿は貧乏な暮ら

しを表現する手段ともなった。井原西鶴の『世間胸算用』（1962）にも「むつかしき紙子浪人」等の表現が見える。紙衣を着用した人は僧侶に始まり、武将から一般庶民、俳人、遊女などまで拡大した。しかし、明治以降になると、機械生産により、廉価な布や綿などが容易に手に入れられるようになり、日常着としての紙衣は次第に姿が消えていったといわれている。

## 2.2 中国における紙衣イメージの変遷

紙衣が着用された歴史に関する中国の最も古い記録は、南朝梁代に著された『名医別錄』（452-536）の「武陵人作壳皮衣甚堅好尔」（武陵の人は楮の皮で服を作った。この服は非常に丈夫で良いものである）である。日本の場合とは異なり、中国においては紙と衣服の組み合わせが、葬儀用品のような非日常的な目的と、日常的の衣料品としての用途という二つの観点から捉えられると考える。

中国では今まで墓参りの時に紙衣を燃やして祭祀を行う習慣が残っているが、入手した資料によれば、紙衣を着用して埋葬される慣習はそれよりも早く始まったとみられる。『資治通鑑』（1065）によると、五代後周の始皇帝郭威は終焉の際、大臣に贅沢な葬式や副葬品をせずに、自分の遺体は紙衣を着用したまま埋葬するように命じた。それ以降、郭威は節儉のイメージで後世に名を知られ、紙衣は中国の通過儀礼の葬式と関わってくるともいわれる。

その一方で、紙衣を日常的な衣服として大量に着用していた時期は、主に中国の唐と宋の時代と考えられる。唐以前、中国全土の人口はそれほど多くはないため、桑や麻の栽培量は国民の生活需要に応じられ、一方、元以降から人口は急増したが、綿花によって衣料の問題はある程度緩和されたと思われる。そして、唐と宋の二つの王朝にわたる約600年間、食糧問題さえ解決できず、無論衣料の不足である。ちょうどこの時期、中国の製紙技術が大きく発展を遂げ、服の足りない貧乏な庶民たちは寒さを防ぐために、自ずから紙を利用して防寒服を作ったと考えられる。飢えと寒さに苦しむ貧しい庶民の他に、『宋史』卷一九四には、兵士の中にも「紙衣を着て甲冑をまとった者」がいると記録される。日本の戦国時代に武将が紙衣を着用することによって地位の高さを表すこととは異なり、それに対して王安石は「極めて窮屈した状態」と嘆き、「これこそ最大の憂いである」と指摘している。

中国では『後漢書』の時代にはすでに絹の纖維を使った羅や錦など高級な織物が作られ、相当以前の時代より織物は始められたと考えられる。それゆえ、経済的な原因以外に紙衣を着用したのは恐らく特殊な動機づけがあると推測される。例えば、宗教との関わりから見れば、仏教の面での紙衣の着用は日本と似た原因と傾向が見られる。特に紙衣の隙間なく風を通さない特徴は、道教の物欲を断絶する「清心寡欲」という教えに適合するため、道教の教徒が奥山で修行する時よく紙衣を着用したといわれる。また、上層の知識人が仏教や道教における紙衣を着用して修行の姿を憧れ、世を避ける生き方を送りたい志向を表すために紙衣を着用して、役人も僕約なイメージを人に与えるために意識的に紙衣を着用した例が『宋史』より見られる。

## 3. 現代の紙衣

日本においては古来より「紙は神に通じる」とされ、特に白い紙には「浄化する力」があると信じられている。現代においても仏教の面における紙衣の着用慣習は依然として継続されており、東大寺の修二会では現在でも練行衆の装束として紙衣を着用している。その一方で、宗教儀礼以外の面においては、歌舞伎の衣装のようなごく限られた場合で紙衣が着用される事例しかみられない。

しかし、近年、機能性と美しさを備えている和紙が日本国内外で注目されるにつれて、紙衣も再び注目されるようになった。2001年、デザイナーの桂由美は越前和紙の職人技と無限な可能性に魅了され、長田製紙所の職人と一緒に和紙ドレスに挑戦し始め、2003年のパリオートクチュールコレクションで「和紙を越えた和紙」と称される「WASHI-MODE」という作品を発表し、日本古来の伝統美を生かした作品で海外メディアを驚かせた。その後桂由美はインタビューを受けた時、「コレクションが終わったら、創作した和紙ドレスはどうする？販売するか？人に着てもらうか？」という質問に對して、「無論それは日常的に着られる衣服ではない」と答え、そして「見せるドレスで、人を感動させる」という理念を抱いて創作し始めたと述べている。そこで和紙の意義はまさに単純な素材を超えて、「文化的な符号」となって、日本文化の一部分として存在すると考えている。

一方、現代中国において、紙衣はすでに人間が着られる衣服としての機能を完全に失い、葬具として廣汎的に使われていると思われる。葬式は別の世界へ行くのに必須な道程であり、そこには、人間が「あの世」に対する想像も含まれている。中国の葬儀文化全体を通して見ると、その思想の基盤としては「魂は滅びない」という観念であり、人間は死後、鬼

神となって別の世界でまた暮らしていると信じられる。そのため、「あの世」での生活用品の準備が必要であり、紙という媒介によって具現化される。例を挙げると、冥界に生活するための紙で作った住宅、着用する紙衣、さらに財産としての紙銭など、それらの紙道具を全部焼き、必要に応じてあの世で使用できるようにする。特に近年紙衣は葬式及び墓参りにおいて不可欠な道具として、怪異や恐怖なイメージを持って小説やゲームなどの文芸作品に登場している。例えば2021年の中華風ホラー推理アドベンチャーゲーム「紙装束」シリーズなどがある。

#### 4. おわりに

本研究では、上述するような日本与中国における紙衣に対する考え方を時代の変遷に沿って両国の共通点と相違点を考察することを通して、日本の紙衣に対する考え方の特徴を明らかにした。

まず、中国では紙衣は葬儀用品としての意味が強調されるのに対して、日本では紙には神聖な力があると信じられているため、紙衣は平安時代に地位の高い僧侶たちから着用し始めたのではないかと考えられる。そして現代においても清潔さの象徴と見なされて仏教と深く結びついている。また、中国での貧困の象徴とは異なり、日本では室町時代から戦国時代にかけて紙衣は名譽及び出世のシンボルとされている。そして、中国においては主として庶民が紙衣を着用したのとは異なり、日本においては僧侶、武士などの階級層から江戸時代に庶民の防寒着まで広く普及してきたというというのはトップダウン形の変遷上の特徴が見られる。

つまり、日本では、紙衣に対しては、単純な用具になる前に、人間より宗教的な神聖さ、社会的地位の象徴性等理想的な属性が付与されるという考え方の特徴があるのでないかと考えられる。そこには、日本において、「神」と同じ発音を持つ「紙」を、神さまを敬う気持ちを表し、神さまと繋ぎたい媒介として、紙には人間の大切な想いを込めていた思想が根底にあると推測される。

近年、日本における紙衣は日本の伝統を象徴する文化的なシンボルとなり、再注目されている。紙衣は、今後、SDGsの促進にも寄与する新たな可能性や衰退する和紙文化と和紙産業の活性化にもつながる可能性を持つのではないかと考えられる。

#### 参考文献

- 大道弘雄 (1955). 『紙衣』 リーチ書店.
- 吳學棟 (2012). 「古代紙衣的文献研究」 『黑龍江造紙』 1,30-32.
- 片倉信光 (1988). 『白石和紙布紙衣』 慶友社.
- 木村有見 (1997). 「紙衣小考」 『和紙文化研究』 5, 38-56.
- 久米康生 (1990). 『和紙文化誌』 毎日コミュニケーションズ.
- 王曦・梁惠娥 (2016). 「我国古代紙衣的歷史淵源及發展」 『服裝學報』 4,432-437.
- 定延久美子 (2010). 「紙衣和紙および紙衣和紙を用いた衣服デザインの研究」 『デザイン学研究』 56 (5), 87-96.
- 胥樹婷 (2016). 「論紙帳、紙衣、紙被」 南京師範大学大学院中国言語文学研究科修士論文.